

2010~2011年度 IM第6組報告

大阪鶴見RC 会長 林 成志
IM実行委員会 委員長 佐藤 俊一

テ ー マ：夢ある日本の未来とロータリー
ホ ス ト：大阪鶴見RC
日 時：2011年3月5日 15:00~18:45
場 所：太閤園
登 録 者 数：774名
出 席 者 数：162名

本年度から「新世代奉仕」が、第5の奉仕部門として設置され、この奉仕プログラムの目的が若者の育成支援であることから、第1部においては、この若者の育成支援に焦点を当てて「新世代を担う若者をどう育てるか」のテーマで、招待パネリスト、ロータリアンを交えて、この問題を考えるパネルディスカッションを実施しました。

最初にコーディネーターの佐藤俊一より、政府の「子ども・若者育成支援推進本部」の作製した「子ども・若者ビジョン」を資料として紹介し、若者育成支援の総論的な考え方を共通の認識として把握してもらった。そして各クラブの行っている青少年活動のいくつかをとりあげたが、今回は主として20代より30代の若者を対象に話を進めることで各パネリストより意見を求めた。

パネリストの一人、谷本親伯大阪大学名誉教授より、今の学生の問題点として、国際学会において話の内容はよいのだが、外国語を含めてのコミュニケーション能力の不足を指摘されました。それには海外での体験と教養が必要とのこと。また今の大学教育のあり方についても辛口のコメントがありました。

次のパネリストの伴義孝関西大学名誉教授・府レクリエーション協会会長より「親指は何のためにあるのか」の問いがあり、親指の役割がものをつかむことから携帯を動かすという身体の経験を通り越して頭の中の動きのみになってしまっているのが現代の若者を象徴しているとの問題提起がありました。身体での経験がなく頭で考えすぎる傾向が友達づきあいのできない大学生を生んでいるとの指摘がありました。レクリエーション協会では「歩く」ということを再認識し、人とかかわり文化の回復を考えているとのこと（歩育）。また関西大学はロータリーとの繋がりをもち、過去ライラを通じての連携講座、関西大学ローターアクトの設立など、これからもロータリーと大学との連携プログラムを進めるための提案がありました。

3人目のパネリストは大阪RC会員でもある立野純三氏より自分の体験を通じての若者育成の見解をのべられました。大阪青年会議所に入会し、自己の国際感覚に目覚めたこと、その後、理事長時代にセイブザチルドレンジャパンを設立し現在も名誉理事長として活動していることの話がありました。企業のオーナーとしての立場からは企業の成長のためにはグローバル化は避けられず、若い企業人に対しては単に英語が話せ



るだけでなく日本人としてのアイデンティティをもち、日本の文化を説明できる人材を求めているとのことでした。

最近の若者は内向き傾向にあるのではないかと質問に対し、日本を離れることで就職活動に支障を生じる状況、あるいは大学側のカリキュラムの問題、受け入れ企業での問題もあり、また男性より女性のほうが国際交流に積極的であるとの現実もありました。

最後に佐藤パネリストより新世代プログラムの画像による紹介があり、プログラム自体は立派ではあるが今後とも検討すべき課題があるとの認識で終了しました。

第2部として原丈人氏の講演がありました。

講演内容はアメリカを中心とする現在の資本主義は株主至上主義であり、株主の利益を優先するあまり金融資本主義の欠陥を露呈しました。早くからこの欠陥と危機を予見し、会社の事業を通じて、会社の関係者・地域社会・地球全体に貢献することが価値として認められるとする公益資本主義を提唱し、日本こそがこの新しい資本主義の担い手となり得ると述べられました。この考えはロータリーの職業理念と相通じるものとおもわれます。

また、民間の活力を利用して、教育・医療・栄養不良の分野で発展途上国を援助し、貧困を解決する、画期的な仕組みを開発・実践されつつあります。それと共に、日本の若者たちに、これらの援助体験を通じてグローバルな視点と多様な価値観を身につけさせる人材育成プログラムを提案し、世界に貢献する日本人づくりのプロジェクトを呼びかけておられます。

